



薬の名前をバックアップ！

放送日：2012年5月7日(月)

皆さんは、普段飲んでいる薬の名前を覚えていますか？

災害時には、薬の名前を控えておくことが、速やかな医療支援を受けるために必要です。

東日本大震災では、避難所に医療支援物資が届いた後も、薬を受け取るために何時間も待たなければならないケースが少なくありませんでした。その原因の一つに、避難者が普段飲んでいる薬が分からなかったことが挙げられます。

「症状を抑える効果」は同じでも、成分が異なる薬がたくさんあります。人によっては、特定の薬と相性が悪いこともあるのです。

そのため、診察手段に限られる被災地では、これまでの症状や薬について覚えておくことを 医師たちが聴きとるなどして、手探りで治療方針を見極めざるをえませんでした。

簡単に薬の名前を記録する仕組みを作ることで、少しでも早く医療支援が受けられるようにしたい。そんな思いから、多くの被災者が持ち出していた「携帯電話」を活用した取り組みがすでに進められています。

まず、番組でご紹介したのが、京都市にあるNPO法人が進めている「ポケットカルテ」という取り組みです。

ポケットカルテは、いわば「情報の銀行」です。ポケットカルテに加盟している医療機関や薬局で受け取る領収書には、QRコードと呼ばれるバーコードが印刷されています。このQRコードを携帯電話で読み取ると、瞬時に薬の名前を個人専用のサイトに登録することができます。

読み取った情報は外部のサーバーに保存されるため、全国どこからでもアクセスできます。パスワードさえ覚えていれば、自分のパソコンでなくてもアクセスできることから、災害時に速やかな支援が得られる手助けになると期待されています。

ポケットカルテには、平成24年5月現在、2万人以上がシステムを利用しており、NPO法人では、今後も利用できる医療機関や店舗を拡大していく予定です。

このポケットカルテは、外部のサーバーに「情報を預ける形」で運用されていますが、

携帯端末自体に、薬の名前を保存する仕組みも開発されています。

神奈川県を中心に店舗を展開している薬局では、「smartお薬手帳」というアプリを開発しました。薬局のカウンターには、QRコードを表示するモニターが設置されていて、患者は携帯電話をかざすだけで、受け取った薬の情報を携帯電話に登録することができます。

この方法だと、災害時にインターネットにつながらない状況であっても、速やかに現場に駆け付けた医師に、これまで飲んでいた薬の情報を伝えることができるメリットがあります。ただ、携帯電話自体が壊れてしまうと、情報を取り出すことができません。

東日本大震災を機に、薬の名前をバックアップする仕組みが注目を集めています。

国では、全国どの医療機関で薬を受け取っても情報がバックアップできるように、統一規格を設けようとしています。ただ、議論は始まったばかりです。

番組では、携帯電話を使った最新の仕組みをお伝えしましたが、薬局で受け取る薬の説明書を「非常用の持ち出し袋」に入れておいたり、携帯の写真で撮影しておいたりするだけでも、災害時には有効です。

速やかな医療支援が受けられるように、日頃から飲んでいる薬の記録を取っておきましょう。

[▶ 「くらし安心・安全」ページへ](#)

[ページの先頭へ](#)